

ヒジノワホームルーム\_6

都市で、地方で、普通に暮らす市民が「福島」を考える日

対談

## 都市生活者の原発、避難者の原発

吉田邦吉 Yoshida Kuniyoshi

『ヴェルストガイスト・フクシマ』編集長 | 会津若松市在住 (大熊町より避難)

廣瀬俊介 Hirose Shunsuke

環境デザイナー・風土形成事務所 主宰 | 市川市在住

日程 | 6月17日 (土)

会場 | 益子町ヒジノワCAFE&SPACE

自主上映会 『「知事抹殺」の真実』

対談と座談会「都市生活者の原発、避難者の原発」

## 対談「都市生活者の原発、避難者の原発」の記録

《襲田》今日は、吉田邦吉さんを福島からお招きしています。大熊町で生まれ育って、生活を立てていらっしやって、原発事故の後、今は会津若松市に避難されて、情報の発信のため『WELTGEIST FUKUSHIMA (ヴェルトガイスト・フクシマ)』を創刊されています。今日は、一緒に制作しているお仲間の方も何名か来ていらっしやっています。

私たち企画者側のホスト的な感じで廣瀬俊介さんをお迎えしました。廣瀬さんは千葉縣市川市にお住まいで、ご専門は環境デザイン、ランドスケープデザインともいうのですが、建物以外、外ですね。自然、生態系、自然環境系の領域でデザインの活動をされています。そういうご専門の立場からも…。それから一市民としても、原発の再稼働に関しては一貫して反対の意思を発信されてきていて、2012年から毎週金曜日は国会前の抗議行動に、基本的に出張がないときは欠かさず参加して、発信をされている。どうしてそこまでできるのかなという疑問もあるのですが、そういったお話も聞きながら、お二人の対談を進めていきたいなと思います。

ここからはマイクをお二人にお渡ししたいと思います。今日、昼間『「知事抹殺」の真実』の映画をご覧になった方もいらっしやると思うのですが、その辺の話からお二人に入っただきたいなと思っていて。吉田さんは福島県民でいらっしやるわけで、佐藤栄佐久知事の時代ももちろんご存じ。廣瀬さんは環境デザインのお仕事で、福島県の土木部でのお仕事も長くて、浪江町のお仕事もずっとされていて、佐藤栄佐久知事時代に福島県のお仕事をされているんですよね。その辺のところの話から入っただいただいてもよろしいですか。では、よろしくお願ひします。

1.

## 違和感と批判から始まった

《廣瀬》声がひどく枯れてしまっていますが、マイクで拾ってもらって、なんとか聞こえますか。今週は国会で「共謀罪」法案の審議が続いていまして、火曜日から木曜日まで連日国会前での抗議行動に参加してこうなりました。昨日も、毎週金曜日に首相官邸前と国会前で行われる反原発抗議行動に参加したのですが、今日のこの会に備えて声は出していません。

今日ここで上映された映画『「知事抹殺」の真実』のことから話に入りたいと思います。映画の背景にも関係する私の個人的な話を少しして、その後は私から吉田さんにいろいろ伺っていくような感じで進めます。

映画に、知事が「うつくしま、ふくしま」という県政の目標を立てたことが出てきました。その背景を私も知っています。1987年にリゾート法（総合保養地域整備法）という法律が制定されて、リゾート開発に関する規制緩和などがなされました。そのときに福島でも、佐藤知事の言葉で言えば、「東京資本に福島県が全部買い占められてしまうのではないか」

\*註1 というくらい、ゴルフ場やリゾートホテルなどを開発するために土地が買われていて、それを改めて規制するために、福島県は1989年、全国に先がけて「福島県リゾート地域景観形成条例」を制定しました。そして、乱開発をいったん止めさせた後、残った自然、景観を生かしていこうということで、「うつくしま、ふくしま。」という基本目標 \*註2 を立てました。

\*註1 『守る景観、創る景観-'97 うつくしま景観フォーラムの記録』福島県生活環境部県民生活課、1997年、23頁

\*註2 「21世紀の新しい生活圏 - 美しい福島 - の創造」、1993年

以来、知事は県内で精力的に景観とは何かについて語る講演を始められます。その中では、それまで福島県がしてきたことの自己批判も含まれました。たとえば、会津若松駅前の地下道入口上屋は、当地の鶴ヶ城を模したものになっているのですが、歴史遺産を大事にすることはそのにせものをつくることではないと言い切られていました。私もそう思いますが、それがわからずによいことと考えるとそのような専門家が少なくありません。しかし、知事は明確にそれを否定して、地域の自然や歴史、文化に表面的にではなく深く則した景観、環境のデザインをしなければならないと訴えられていました。

私が在籍していたデザイン事務所が、その関連事業にかかわる業務を委託されるようになり、私がおの中の一つの担当者になったことから福島の方々との関係ができました。会社を

辞めて独立してからも、関係は続きました。

その一つとして、浪江町では 3 年をかけて中心市街の一角を占める国道拡幅区間の環境デザインを行いました。県から依頼されたのは、浪江町の風土について調べた上でデザインをして欲しいということでした。それで、「浪江の風景を読む会」という集まりを企画して、町の自然や歴史や文化に詳しい人に毎回先生になってもらい、午前中に講義を受け、午後は城跡やお寺など現地を訪ねてみるということをしました。成果は『浪江の風景読本』というものにまとめて、それを基に道路の設計をして、設計が終わってしばらくしてから原発事故が起きてしまいました。

これに限らず、私は福島県のほぼ全域を調査させてもらって、各地でいろいろな方にお世話になってきました。だから、原発事故の後、福島の方々が大変な目に遭われていることに対して、自分も縁のある者として何かしなければいけないと考えました。浪江町役場の方には、『浪江の風景読本』が、避難をされていてふるさとを恋しく思う人に役立つかもしれませんと進言し、県で作ったものがまだ残っているはずだからともお話しして、県に問い合わせさせていただきました。県からは残部をすべて町にお渡しいただけました。そういうつなぎをしたり、原発に反対する抗議活動に参加したり、考えつくままにいろいろやってきました。

ここから、吉田さんにお話を伺いたいと思います。吉田さんは原発事故に遭って避難をされ、以降、原発の問題、福島の問題、日本の問題に対して、出版活動を通して発言、発信をされてきています。私はそれを、原発の問題への対し方の参考にさせてもらってきました。

自分が親しくしてきてきた福島の人たちは、事故のことをすごく悔しく、悲しく思われています。でも、震災後に SNS、Twitter と Facebook を始めたのですが、いろいろな声があることを知りました。「風評被害」に困っているからと、とにかく福島は安全と言いたい人々がいます。その気持ちも分かります。自分がそういう方々のお気持ちを十分に汲むことなく、ただ危険ですと触れ回っていると、さまざまな事情があつて福島から避難しきれない方や、愛着を捨て切れずに残っている方を傷つけますよね。

そういう乱暴なこと、粗暴なことを自分がしないように、いろいろな方の切実な思いや意見を聞いたかったんです。そういうなかで、『ヴェルトガイスト・フクシマ』というこの本は本質的なものに思えまして、原発の問題に対して行動する上での参考にするようになりました。

だから今日も、これからの自分の原発への対抗活動とか、避難者の方と接することとか、いろいろなことの参考にしたいくて質問を考えてきました。それに沿って吉田さんからお話を

伺っていきたいと思っています。

最初は『ヴェルトガイスト・フクシマ』と吉田さんのご関係についてお聞きします。どうしてこの本を発行しようと思われたのか。それから、この本の発行の継続に関するお気持ちやご苦労など。そのあたりからお話しいただきませんか。お願いします。

《吉田》 分かりました。吉田邦吉です。はじめまして。今日は益子に来られてうれしいです。益子町には何日か前から来させていただいて、結構いろいろ回って、際だってここはおもしろい町なんです。そんな話をしたいところ、『ヴェルトガイスト・フクシマ』ということなので、自分の話をさせていただきます。

なんでこれを始めたかを最初から紐解きますね。2011年に大熊町から避難して、7月からハワイに避難して、10月ごろに日本に戻ってきました。2011年3月ごろは学習ボランティアなどで町に協力していたりして、ハワイで避難者を受け入れているということで、たまたま申し込んだら受かったの…。

3カ月行ってホテルに帰ってきてすぐ、今度は仮設住宅ですといわれて仮設住宅に入って、こんなことではいけないなと思って。日本列島をずっと離れたところから思っていたときに、今までの自分は何をしてたんだろうな、と。ちゃんと自分の暮らしを守るといえるか、そういうことを考えてこなかったなと非常に反省したんですね。そのためには自らが学ばないといけないし、活動を何かしらしていきたいなと思って、帰って10月ぐらいになって、被災者の会などがあるので入って、役員になって手伝ったりしたんですね。

その団体ではかなり激しいことを言っているわけです。僕などはもう少しやわらかく言ったほうがいいのかとかと思うのですが若者なのでほとんど相手にされない。困ったなと思いながら2~3カ月ぐらい続け、ピラ配りとか一人で、夜中に仮設住宅で。

もちろん署名はものすごい数が集まったんです。98%ぐらいの署名率だった。けれど、このままではいけないという意識が自分の中であって、それで一回その活動をやめたんですよ。いわゆる政治活動です。政治活動を一回やめて。

それで1月になって、そのころに「原発避難者、賠償金、うらやましい」みたいなことが、インターネットでも新聞でも、連日連日、テレビをつけても、新聞を見てもインターネットを見ても、ものすごくある。これはもう町を歩けないと思いました。恐ろしい社会ですよ。本当に。もし原発避難者ですと言おうものなら、強盗でもされるのではないかと。自分だけならまだしも、自分より弱い家族とかどうしようと、すごく心配になりました。

そんなに悪いことしたかなとか思いながら町を歩き、「どちらから来られたんですか」などとよく聞かれるではないですか。今はここに住んでいるんですとか、ここの者ですとか、なにか濁したりしながら、こんなことでいいのかと。

では、マスコミが憎いからマスコミをたたけばいいかと思いましたが、それもなにか違うなと思って、これまた無駄だと思ったんです。団体もそうだし、マスコミもそうだし。そういうのをやめて、ごみ拾いから始めたんです。自分が無関心であって、地域が大事だと思っていたけれども、ごみ拾いなんかしたことなかったし、本当に町が汚されたときに、では自分がきれいにする活動をしていたのかなとすごく疑問に思って、それでごみ拾いをして、いわき市と大熊町の友情のためにやって、80 袋分のごみを一人で拾ったんです。そうしたら、いろいろな人たちが声をかけてくれるようになった。それはインターネットで発信していたのです。活動してなにか、いいこともあるんだなと思いました。

春になって、作家の人たちが取材していいですかとか、そのうち来るようになって、自分が声をかけたりもありました。だんだんもの書きの人たちへ自分の目線がいくと、すごい発言力が大きいということで、ものを書くっていいんだなと思って。けれど今までずっと読むだけで満足していたし、書くなんて別に興味がなかったんです。読むのが一番面白いではないですか。だから、それでよかったんです。哲学書を開いて、誰にも話さずに読んで、暮らしていた。

それで、書く練習をしました。廣瀬さんも関わっていらっしゃる東北芸術工科大学の先生をしたことがある民俗学者の赤坂憲雄さんが、「ふくしま会議」というのを震災後に開催していましたよね。みんなで集まって会議をしようみたいな。

それを僕は遠巻きに見ていたんです。2013 年の春、ある日、なにか集まっているけれど、この団体は本当に思ったことを言っていないんじゃないかと思ったんです。それで、ものすごく長文の批判のある記事に対して送りつけたんです。そうしたら、では君が書いてくれと言われて、どういうことですかと言ったら、ライターになってくれということで、それでライターが始まったんです。批判から始まった。

それで、ふくしま会議のウェブマガジン「ふくしまの声」というところでライター活動をしていました。しかし、今度はそこの方針と僕の方針とだんだん合わなくなってきました。なにか違う、やはり違うと思いつめて、それを赤坂さんに言ったら、これはまだどこでも言っていない、初めて言うことです。趣旨的には、汗を流し、ゼロから創造し、自らがメディアに成る。つまり、私がそろそろ独立する時期なんじゃないかいと言ってくださって、その

ときに、ただ単にフリーのライターになるか、今流行りの、ライターの集団でメディアとなるウェブマガジンをやるかで、考えました。ほかの誰かに自分が言いたいことを適当にされるぐらいだったら、自分が言いたいことはきちんと自分で語っておこうと思ったんですね。それで、仲間がいたので、知り合いや仲間に声をかけて、たぶん 20 人ぐらいに声をかけて、いま残ったのが 10 人ぐらいだと思います。別にけんか別れしたわけではないのです。みんなそれぞれに暮らしがありますから、時間がないとか、いろいろありました。今は落ち着いています。

《廣瀬》 違うなと感じたのは、どういうところですか。

《吉田》 ふくしま会議のときは、まず、これはそのライターの方にも言い分があるので、なかなか話しづらいことですが、簡単に言ってしまえば、福島を一緒くたに語れないところを、すごくおおざっぱに書いてあったんです。それ、違うじゃん。おおざっぱに語っていいときもありますが、だいたい考えたほうがいいというか、そういう配慮は必要だと思うんです。そういうことがないまま、ざっと書いてあった。本人は心配していたつもりだったと思うのですが、僕には上から目線に見えたんですね、そのときは。そのときはですよ。今見たら、福島のこと知らないんだねというぐらいで、なんとも思わないかも分からないです。

《廣瀬》 時間の…なんというのですかね、皆さんもそうだと思うのですが、震災以降の時間の進みに沿って、自分の考え方とか思っていることが変化してきて…というのはすごくありますよね。

《吉田》 ありますね。

《廣瀬》 そのときはそういうふうに。

《吉田》 はい。まさに 2011 年の暮れ頃は連帯すべきだと、庶民は団結すべきだと思っていましたから。それが今度は、ばらけるということは、もう勝手にしろと。俺は俺でやる、団結はしない、知らん。という逆のことを言って（笑）。

でも、個人個人がやりたいことしかしないのだから、したいことを好きなだけ最大限やって、お互いをリスペクトできれば、緩やかなつながりができるのではないかと。それが、クサノネなんですけれど、あとで言います。

《廣瀬》 ふくしま会議では、一つには福島を一緒くたに語っていた記事があったと。それに対して、一読者として『ヴェルトガイスト・フクシマ』を読むと、広い視野の下に、いろいろな視点から書かれていると思うんです。福島のあちこちのことが出てきはします。でも、実際にもっと広い世界のことを福島から見て、あるいは福島を一つの考える物差しというか、

きっかけにしながら、世界を考えているとか、未来を考えているとか、人間を考えている。そういう本であると思えるのですが、編集方針はどのようなものなのでしょうか。

《吉田》編集方針はなかなか難しいものですよ。先ほども申し上げたのですが、人は好きなことしかしないので、まず僕自身が一番やりたいことをやり続ける。すると僕は楽しくなるし、みんなも、僕も好きなことをやってみようとなるのではないかなと思って。

今のところ、僕しかヴェルトの単著を出していないのですが（妻との共著もあり）、雑誌の表紙に名前が出ている号は個人号、単著なんです。一方で、こういうふうにな名前がない号は全員で作っているんです。これを全体号と呼んでいます。「全体号、そろそろやろうか」という感じで、全体号を出す。（実物の雑誌を指して）これは「同調圧力」という、いじめのようなものに関するあれです。これは集団的自衛権の。それで戦争は困るという。今日来てくださっている吉田葉月さんと天井優志君がデザインしてくれた表紙です。すごくいいデザイン。

あとは、これ（2号）は結構計画的にやりました。最初はやはり思いきり厳しいことを言わないと、自分の雑誌のレンジが浅く薄くなってしまうと考えたこともあります。

《廣瀬》通巻2号「福島から激烈な撃鉄ここに」は、まさにそう思えます。

《吉田》最初からこんなのを出す雑誌というのは、相当過激だなというイメージが持たれると思うんです。でも、それを人は待っていたはずなんです、と僕は思うんです。

《廣瀬》なるほど。単純なことが今浮かんだので、お話ししますが、たとえば、外から福島に手を差し伸べているつもり、これも上から目線かもしれないですが、助け上げたいときに、一番単純な乱暴な言い方を仮にしますが、県の人たちが怒っていてくれれば、こちらも助けやすいということは私も思いました。でもそれは、なかなか怒れずにいる立場の人もいたりするでしょうし、気持ちのごく穏やかな優しい人もいるでしょうから、私は言ったことはないです。でも私の友人は、福島の人にそう言ったことがあります。そんな言い方もないんですが、なんで怒ってくれないんだ、怒ってくればこっちがもっと怒れるという言い方をした人がいました。

《吉田》おっしゃるとおりだと思います。2号に書いてありますが、東電を許そうという人はその記事に出た人の周囲では一人もいないことが新聞に載ったりしているぐらい、実際は怒っているんですよ。ただ、日常生活でずっと怒っていたりできないですから、怒ってばかりいられない。では、今度いつどう怒ろうかというタイミングがないというか。だから、大臣の自己責任発言があったとか、なにかあったんだというときには、ガッと話題が盛り上

がりやすい。推測ですが、そういう面がとにかくありそうです。

そんなわけで、結構レンジが広い雑誌なんだなというのを 1、2 号で分かるようになっていて、だから、「戦争の小窓」という全体号なんかも普通にできるわけですね。表現の自由の幅が広い雑誌になっているわけです。「ヴェルトガイスト・フクシマ」と聞いたとき、人が「福島のことだけと思わない」ようになりたい、それぐらい、いわゆる地域的な福島に限ったことではなく、「WELTGEIST FUKUSHIMA」という言葉を普遍的なものにしたいんです。それで、いじめ号、そして 6 号は主体的に活動する号。そして、7、8 は沖縄。沖縄のことをなにも知らなかった自分が恥ずかしいという思いがありました。9 号は原発避難に関する自由な詩。非常に忙しい人にも 5 分で分かる号。10 号はウェブに関していろいろ悩みを持っている人へとか戦略性、というような冊子です。

こうして話して行くと、だいぶ計画的なのかもしれません。それでも自由にやりたいことをやっているつもりなんです。

## 2.

共通理解のベースをつくる。

《廣瀬》 ウェブに関して悩みを持っているかもしれない、とはどのようなことでしょうか。もう少し皆さんにも聞かせてもらえますか。

《吉田》ウェブっていろいろな情報がある。マスコミもそうですが、たとえば「ゲッペルス型ロビー活動」などの言葉を自分で造語、命名して、嘘も百回言えば本当になるということがウェブで流行ってますよ、そういう方法がいろいろありますよと。愛国心だとか愛郷心だとか、デマをたたけとか、風評被害だとか。たとえば愛郷心と風評被害はセットですものね。

《廣瀬》確かに、そうなることが多そうですね。

《吉田》地域を守るために誤った情報は言わせない。もし間違ったら許さないぞという福島県民の目がある以上、誰もなにも言わない。でも僕が言いたいのは、たとえば、益子町の役場でモニタリングポストが全然軽い数値でした。一昨日ぐらいに自分のインスペクターというガイガーカウンターで測ってみると約 3 倍の数値。これが機械的に最高度に精密かは知りませんが、やっぱり、どこでも一緒なんだよとかひとまず思いながら。福島だけの問題ではないのは、まさに本当にそのとおりです。福島県だけの問題ではなくて。

あれは行政に聞くと、あくまで目安だということになっていたように記憶しています。実

際とは違うような全然軽い目安がある。

《廣瀬》 役場のモニタリングポストの周りだけよく除染してあるといますね。私も大学で教員を務めていた当時、学生と一緒に地域活動をするときは複数の測定器を持って行って、それぞれの測定値をつき合わせて、役場が発表する測定値とまたつき合わせて、安全かどうかを判断しようとしていましたね。

《吉田》 ですよ。

《廣瀬》 公的に発表している値と自分たちが測って知る値が違うことがあるんですよ。

吉田 違います。よく言われているのは、0.13 以上はなんたらかんたらとか、いろいろあるんですね。あの目安が結構議論を呼ぶと思うんですが、きちんと表示したほうが信頼があるよとか、なんであそこだけきれいに掃除してしまってから計測しているのかとか、本当いろいろあると思うんですけどね。

《廣瀬》 原子炉等規制法で、1 年間の一般公衆に対する積算被曝量の限度を 1 ミリシーベルトと決めています。仮に 1 日 24 時間屋外にいるとして 1 時間当たりの外部被曝量の限度は約 0.114 マイクロシーベルトになります。地域や地区、そして屋外と屋内で空間線量は違ってきますし、個々人の生活パターンの違いもありますから、この上はそれぞれの環境における実測値と滞在時間から細かく考えなければいけません。そして、ここまでのところには内部被曝量が含まれません。

《吉田》 しかも初期被爆と核種の違いと、いろいろ考えていくと、気分が重くなります。

《廣瀬》 まったくです。

《吉田》 今のネットではいくつか方法があります。最近は YouTube とか Twitter などでは、検索すると、権力側の都合のいいようなことばかりがあつて、右ならえのような内容が出てくるようになっていて。そういう人たちがものすごく連帯してる。これは聞いた話ですが、ある大学生のレポートなどを見ると、そういう内容のまんまで終わっている。なぜかという、ネットでそういうふうに書いてあるのを「勉強した」、というようなことになっている。

先ほどの打ち合わせでも廣瀬さんがおっしゃっていましたが、音楽を消費だけして、根本の精神性まで勉強しようとしらない人が多いのではないとか、まさしくそれだなと思って。結構問題だなと思うんですよ。なにかというと、インターネットは電気刺激が強いんですよ。音楽もそうですが。目に入ってくる情報は力としてすごく強い。僕はいつも、タブレットなんかの電子画面はブルーライトをオフする機能がありますよね。あれを必ずやって、明るさを半分ぐらいにするんです。そうすると目にすごくやさしい。距離を置けるので、冷静

にもなれる。寝る前は特にブルーライトをカットするとよく眠れるようになります。体調もよくなります。ぜひお試しになってください。

この雑誌に今の話は書いていないのですが、そういう話ですね。あとは、人権派のふりをして実は違いますとか、脱原発のふりをして実は違いますよとか、そういうなかなかきわどい理屈が書いてあります。仮説ですが。あと、些末な問題をたくさんやり続けることによって、重要なことが隠れてしまうとか。

《廣瀬》 SNS で、かなり議論をされてきたんですね。

《吉田》 そうですね。

《廣瀬》 それとご自分で、たとえば非難してくる相手の本をしっかり読んで、当の問題についてどの程度その人が理解しているかとか、そういうことをかなり咀嚼しながら、今の状態に至られたという感じを受けていますが。

《吉田》 おっしゃるとおりです。たとえば、ある言論人は東電が後援のような、地元で配られる広告などを見ました。その人の本を読むと、地域の人たちが金に転んだ（から「地域が悪いんだ」を読者が導くよう）とばかり書いてあると私には読める。自分らが原発をおこなってにおいて、原発を動かしてない、特に地元のせいにする、それってどうなのかなと。だから、そういう考えでは物事は解決しないので、政治を政治家に任せているから、政治なわけであって、基本的には。庶民が悪いというのはズレている気がします。

《廣瀬》 そうですね。その話題だけでいけば、そうやってみんなが悪いんだよと思わせて、事態の沈静化を図る理屈に思えますよね。震災前に浪江町でも皆さんと話をしていたのですが、上野から常磐線で行くにしても、新幹線で仙台まで行ってそこから戻ってくるにしても、東京から行くのに長い時間がかかる土地の一つでしたから、浪江は。それで、原発を誘致する話が起きて…。それでも、東北電力の浪江・小高原子力発電所はずっと着工されず、2013 年に取りやめられましたが。ともかく、浪江では町の風土について調べて、自然や歴史や文化にまつわることがたくさん残っているよさを生かして町を興していく構想をつくり、その部分となるようにと道路の環境デザインを行いました。

浪江・小高原子力発電所やその他の原発のことに話を戻しますと、最初から仕組まれて貧しい地域が作られたのではないにしても、地域間で貧富の差があらわれてくるとそのことを利用して原発を誘致させていますよね。そのことについては浜通りの各地を見てきて確信を持っているんです。

だから、そこに電力会社から「エサ」を投げられたときに食いついた人たちがいても、そ

の人たちが最初から全部悪いわけではないですよ。結局、その貧富の差を、地域格差を温存しておいて、それを政府や大きな会社が利用しているのですから、厳密に言えば、まず当地の方々「自分たちが全部悪いのだ」と思う必要はないはずです。

それから、私は東京の近隣にいて、東京電力が福島第一原発で発電した電気を使っていた受益者であるという責任意識を持っているのですが、東京の人たちでそういうことについて考えることや発言することを避けている人たちは、しょうがないよ、自分たちも悪いんだよと、話をそこで済ませてしまうんです。それでは問題が解決しません。自分たちは確かに悪いんだけど、自分たちばかりが悪いわけではないので、電力会社や関係する官僚や政治家らの問題はきちんと追及しないと、状況が改善できるわけがないと考えています。

《吉田》 そうなんですよ。日本の空気がよくありがちなのは、批判してはいけないということで、批判なんてそんなのはという、めっそもないみたいな空気。ところが、僕などは批判でできているような人間で、批判の塊のような人間で。批判から生まれてきたというぐらい（笑）。

議論はそもそも批判がないと成り立たないんですよ。反論があつて、僕はこう思う、でもそれはこういうまた違う理由があるよねといわれたら、それもそうだよねと。そのとおりだね。では、最初の言っていたのと違うかもしれない、そちらに俺は賛成しているとか。そういうふうには、僕だったら言うつもりでいるんです。人と議論をするときは、必ず相手の議論が正しい可能性を探るんです。自分が折れてもいいという思いで話すんです。そうでないと本当の共通の理性というのは構築できないのかなという気がします。

《廣瀬》 そうですね。哲学の方法としてよく知られているソクラテスの「ディアレクティケー」を思い出します。よい対話ができている時、相手に思わぬ指摘を受け、あるいは相手の言に触発されるなどして、自分の内側から思いも寄らぬ考えが発してくることがあります。話しながら考えがまとまることも。このような効果を意識して、対話を有効な思考の方法として用いることをソクラテスは推奨しました。議論を通して、なにが本当なのか他者と協力して探ることは、一人で考え込んで思考が偏るのを防ぎ、自分一人では気づけないことに気づくために有効ですね。

たとえば、自分がなにかをはじめに思い浮かべた理由は、あることの本質が見きわめたかったからだとすれば、はじめに思い浮かべたことが間違っているとかが正しいとかよりも自分が見きわめたかったことが見きわめられた方が当初の目的が果たせて満足できるはずです。そのことが自分のこれからは役立ちます。それなのに日本の人々はよく、批判か

らは何も生まれないなどと言って本当の対話や議論を避けているように思います。そんなふうに考えてしまいがちになる教育を受けているのかもしれないと感じることもあります。哲学研究者の中には、哲学を実践する意義を理解できず現実を通して自身の哲学を研鑽していないように見える人がいます。そうすると、悩める人々の心をなぐさめたり助けたりし、人生や人間関係や社会にポジティブに向き合えるように支えるなどできる哲学の大切な成果が、人々のために生かされにくくなるでしょう。

《吉田》そうですね。ディベート教育がイコール民主主義教育にもなるということと。あともう一つあるのが、最近、本で中井久夫さん、精神分析学の人で、『分裂病と人類』という本があるのですが、すごくおもしろいです。とりあえずざっくり言いますと、いわば、柳田國男が言っていた常民とか、田園の人たち、僕は稲作農家ですが、あとは工場とか会社員とか、そういう「いわゆる一般的な人たち」と「そうでない人たち」、アーティストとか表現者とか、なにかちょっと特殊な人。ちょっとだけ特殊な人。そういう人たちというのは、ちょっとだけ特殊だから、やはり違うことを言うし、当然、違う感性を持っているんです。その感性でものを言うと、なんだあいつ変わり者じゃん、こちら側のひとまとまりのほうが一線を引いていくような、そういうようなことを書いてある本なんです。

そして、感性豊かな人たちは、実は縄文の狩猟のほうの流れがあるから、ものが動いたときに予兆をさっと捕まえられる力があるのではないかな。だから、なにかが危機になったときも敏感に感受性を持って危機感を持てるのではないかなということなんです。その本では、そういう分析をしていると思います。

こちら側のちょっと変わり者集団はどこへ行けばいいかということ、上に伸びるしかないそうなんです。あと、あるのは下。だから王とか、昨今では編集者とか、ライターとか、自分がやっていることを徹底的に磨き上げるのが一番いいみたいなことが書いてあったんです。あとは数学者だとか。

農耕系のほうの人たちには農耕系統の美德があるわけです。毎日きちんと決まった時間に起きて、決まった仕事をして、夜になったら家に帰って、呑んで遊んで寝るとかそういう。いわば、一般的ハッピーライフのような。そういうものを僕は否定しませんが、僕もそれを美德だと思っていましたから。

よってディベートだけでなく、本能で分かる哲学者のような人たちが狩猟採集系の側にいっぱいいるんですね。「私は理屈とかは向いていないけれど、これがヤバいということ

はすごく分かる」というような人。たぶんいっぱいいると思う。

そのへんを、僕らはある意味では理論、表現、行動などでなにか……「共通理解のベース」のような、土台を作っていくというのが大事なのかなと思ったりします。

3.

フクシマという「世界精神」を。

《廣瀬》なるほど。これまで、人間にとって大切な哲学をより多くの人々に伝わりやすくするために音楽や小説や映画などの表現が生かされてきたことは数々ありました。その反対もあるということですね。感性のすぐれた人の直観を理論に直していく知の営みも、確かに有効と思えます。

《吉田》廣瀬さんの『風景資本論』の最後で、このように書いていたんです。311 が起きることに関する予測の意味合いで「自分にはこのような感性はなかった」。僕、ちょうどフョイエルバッハを読んでいたので、ビビっときたんです。感性というのは個々人に宿るもの、理性というのは共通にあるもの。これはヘーゲルの考えですが、ヘーゲルが大好きだったフョイエルバッハは最後にヘーゲルを批判するんです。理性の話は置いておいて、感性は個々人にあるものだから、廣瀬さんはそこでそう書いたんだろうなと。……で、今、僕、話しながらなにを言おうとしたか、分からなくなった（笑）。エネルギーが切れました。

（※後日談 ここで言いたかったのは、「共通理性の及ばないところに、個々人の感性が、個々人の感受性が、私の造語ですが【本能で分かる哲学者】というように、重大な問題へ有効に作用しえること」でありました。だからこそ、「感性的な物言いやデマだのなんだのと押しつぶしていく世相は相当にズレていると自分は感じている」ということです。）

《廣瀬》でも、このタイトルは今の話につながるのではないですか。『ヴェルトガイスト・フクシマ』。

《吉田》そうなんだと思います。

《廣瀬》なぜ「ヴェルトガイスト」とタイトルをつけられたのでしょうか。日本では少し珍しいドイツ語のタイトルの本をつくられた理由は。

《吉田》そうですね。これは世界精神という言葉で、フクシマという世界精神なんですね。なので、このフクシマというものが（正確には音だけなので、ローマ字なら FUKUSHIMA ですが別段カタカナでもオッケーです）、一人一人のフクシマを、過去と現在と未来を思っ

ていれば、それでいいですというのがライターがこの雑誌の趣旨なんです。世界精神は、ではなにかというと、まず時代精神というのが実は下にあるんです。ウェブサイトや雑誌のどこにも書いていないんですが、これはツァイトガイスト (zeitgeist) といって、時代精神というのが、各場所、各時代にあって、それらが全部集合したものが世界精神なんです。

僕が好きなエピソードで、ヘーゲルが大学にいたときに、ナポレオンが町に来たんだそうです。馬に乗って。たぶんドイツを占領したときではないかと思うのですが。それを見たヘーゲルは、世界精神が歩いてきたと思ったそうです。ナポレオンを見て。それで、ああ、世界精神いいなと思って。ヘーゲルにそんなことを思わせたのはおもしろいなとか、そんなことを思って。簡単に言うと、精神世界とも言えます。

文は、どうかかってもブツにはなれないんですよ。たとえば陶器には絶対なれないというのは。文は陶器ではないわけではないですか。どれだけ書いても。

《廣瀬》 形あるものになれない。

《吉田》 はい、負けるしかない。

《廣瀬》 空間に情報を漂わせていくようなことでもあるのでしょうか。

《吉田》 そうなんです。

《廣瀬》 書かれた方々が感じられたことが情報になって、それに共感する読者の心に直接届く。形はないんですが、その、情報が形あるものではないということの効果을大事にしているという。

《吉田》 そうですね。形の無いことですね。目に見えない。

《廣瀬》 その可能性を追求されているわけですね。

《吉田》 そうですね。

《廣瀬》 面と向き合っただけの対話に通じるような、書き手と読み手の間で心と心の交信が可能になるような。

《吉田》 そうですね。本当にそれはありがたいことで。今まで人にいろいろ、あれはこうだとか、あいつはどうだとかやってきた自分が、自分でやってみて恥ずかしくなる。一つものをやるのにも「大変なんだな」と思いながら。個人事業の人たちはみんなそうですよね。益子に来て言うのもなんですが、陶芸の人たちがたくさんいらっしゃいますから、自分でものを作るというのはどれだけ大変なことか。「ミチカケ」に書いてありましたね。どなただったかな、陶器を作るということは、苦しいことのほうが多いと書いてあって。そのとおりだなと思いながら。

《廣瀬》この本は、緩やかなつながりを保たれている方々と作られているということでした。重い問題から始まっていて、なにかをしなきゃということで作られて。ところが、書かれている方々は根本に深刻な思いを抱えておられたりしながら、それぞれに日常もあって日常のことを話題にされてもいたり、それぞれの方がそれぞれに書かれていて。そういう自由な、だけど集合体としての力を持つメンバーによって作られている本に思えます。

この本や皆さんの力は、皆さんのこの本とのどのような向き合い方から生まれてくるのでしょうか。それから、私は首都圏に暮らしていて、首相官邸前や国会前でさまざまな団体が主催するデモや集会に参加しやすく、この6年あまりそうしてきました。そして、一参加者に過ぎないのですが、それでもこれからの運動のあり方とか、一般化のさせ方とか普及の仕方を考え続けてきていました。参加者が劇的には増えないことがあって自然そうなります。その中で『ヴェルトガイスト・フクシマ』を通した発信のされ方がとても参考になる気がしていました。そのことを、いったん休憩を入れて後半にお聞きしていきたいと思っています。

《吉田》ありがとうございます。

#### 4.

正しく怒ることで世界は変わるか。

《廣瀬》先ほど、『ヴェルトガイスト・フクシマ』の作られ方、書かれ方、作り手の方々の集われ方に興味があるという話をしました。私の事情から興味があります。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故が起きて以降、いろいろな団体が主催するデモや集会、勉強会に参加してきました。被災地復興はあまりよいかたちで進んでいるように思えず、福島では事故の原因究明も収束もままならないのに各地の原発の再稼働が進められるなど、日本の政治と社会が危険な方向に進んでいるように思えてならず、必死でそうしてきました。テーマはさまざま、原発の問題に関しては毎週金曜日に首相官邸まで行われる抗議行動にほぼ毎回参加しています。今週はとにかく国会での共謀罪審議が問題で、「未来のための公共」という大学生を中心とするグループが国会前で行っていた抗議行動に毎日参加していました。

それ以外には TPP 参加交渉からの撤退を求める抗議行動にも参加していました。他には、たとえば今私が来ている T シャツは学生グループ SEALDs の前身となる、特定秘密保護法に反対する学生有志の会、SASPL が作って、自ら活動経費を得るために売っていた T シャツを買ったものです。SASPL が SEALDs に変わり、特定秘密保護法に続く集団的自衛権、

安保法制の採決に反対し、私もずっと彼らが呼びかけるデモに加わり続けてきました。しかし、参加者は増えたり増えなかったりなんですよ。

たとえば原発の廃止を求める金曜首相官邸前抗議でいえば、皆さんも覚えていらっしゃるでしょうか、2012年6月から7月にかけて首相官邸前の道路を埋めるぐらい人が集まっていたのです。最も多い日には20万人の参加者が集まったと主催者は発表しています。ところが今は、参加者は平均して1000人前後です。昨日は700人で抗議をしました。2012年の梅雨の頃、あのときみんな本当に大飯原発の再稼働を止めたくて必死に集まっていたと思います。こうして政府に抗議の声を届ければ、なんとかなるんじゃないかと。でも、あの時は大飯原発の再稼働を止められなくて、一度あきらめてしまった人もいます。

ただし、このような想像もしています。金曜首相官邸前抗議がきっかけとなって、金曜日の晩には政治や社会の問題に関する勉強会なり集会なり抗議なりが、だいたい毎週、東京のどこかで行われています。金曜の晩にはそうするものだという習慣が、市民の一部に生まれているように思います。だから、人が散ってしまうのではないかと。みんながいろいろなところでいろいろな問題に対して一生懸命取り組んでいて、それで人が分散して。~~ただ~~—そういう意味では、1000人ぐらいでも毎週金曜日に首相官邸前で集まって抗議が続けられていることは、重要なのかもしれません。

政治や社会の問題に対して行動する、発言する人は、日本にも少しずつ増えているとは思っています。でも、あまり増えない。そういう人々が劇的に増えることに期待していますが、そうはなりません。今回の共謀罪なども、騒ぎ方が足りなくて通されてしまうのかなと思っているのですが。

それをなんとかしようと思ったとき、自分はデザイナーなので、まずこのTシャツを作ったんです。日本語を縦組みにして「私も原発に反対します」…「私も」とプリントして。その下にはほかの国の人も分かるように、フランス語と英語とドイツ語の訳も添えました。Tシャツのクリーム色は、太陽をあらわす黄色をドイツの反原発団体がシンボルカラーにしていると聞いて、それをやわらかい色にしてみたものです。

プラカードもつくっています。SEALDsら学生たちがすごく頑張って工夫してつくっているので、グラフィックデザイナーではないものの私はグラフィックデザインが好きですので、こういうものを。私はサッカーをやっていたので、レッドカードを大きくしたような感じで、「戦争法案に反対します」と和英併記したプラカードをつくりました。

でも、うまくはいかないです。少しイメージを変えられても、デモは昔も今も左翼の凶暴

な人たちが集まる怖いものだとか、あるいはデモなどやっても意味がないとか、私の知人や友人にもそう見ている人が多いようです。だから、自分なりにいろいろ工夫を試みているつもりが、社会運動に参加する人を自分の力では増やすに至れていないと思っています。

その先に私はどうなるかという、SNS 上で怒ってしまうんです。なんで分からないのかと。私は大学の教員だったから、おまえたち、大学の教員は学生を守れとか。ドイツにバウハウスという有名なデザイン学校があったのですが、その考え方が進歩的でナチスに警戒され、閉鎖させられているんです。でも、そのときに当時のバウハウスの、3代目の校長はナチに対抗したんです。ミース・ファン・デル・ローエという、建築をやっていたら誰でも知っている有名な建築家です。ナチに対抗を続けて、どうしようもなくなってからアメリカに亡命しました。それを近代デザイン史として、美術大学でみな習います。デザインをしている人はみな知っているはずですよ。

音楽についても日本では同じです。ボブ・ディランが好きなのに今の日本に生きていて政治的な発言や行動をなにもしない人とか、おかしいと思うんです。デザイナーならば、近代デザイン史を知っていたら、今の日本の状態はナチス政権下のドイツとすごくよく似ているのが分かるでしょう。でも、なにもしない。それで怒ってしまうんです。怒ると怖がられるんです。だから、よくないなと思っていて、本気で自分は原発を止めたいのかということではなくて、自己満足がしたいだけなのではないかなと思ってしまったりする。

そのときに、吉田さんはやっていることが違うなと。もちろん、吉田さんも怒るときはすごく怒ります。昨日はずいぶん怒っていましたね。Facebook へ時間限定で投稿して。

《吉田》5分でぶち切れました。他人様に言えないような。

《廣瀬》正しく怒っていたと思うんですが。でも、吉田さんは私のように、なんでそれに気がつかないのかとか、勇気がないんだろう、勇気を出せとかと叱るような言い方ではなく、もっとやわらかく、考える余地や選択の自由度を残しながら、なかなか政治的態度をあらわせずにいる人にもやさしく呼びかけているように思うんですね。

吉田さんはそういうことを、『ヴェルトガイスト・フクシマ』創刊の考え方とともに、よくいう glass roots についても、「草の根」と漢字ではなくて「クサノネ」と片仮名でこの本に書かれています。それが、もっと発言し行動する人が増えてその輪が広がる可能性のある考え方、あるいは実践なのではないかなと思うようになりました。

クサノネというのはなんなのか、それをどう考えているのかお聞きしたいです。ここに集まられている方々も、私がお話ししたのと同様の問題を抱えていらっしゃるかもしれません。

そのような問題を解決に向かわせ、自分の身の回りにいる人々が政治や社会の問題に気づく手助けをするなどしながら、一緒に話せたり動けたりする人が増えていくといいなと思うからです。

5.

狩猟採取民族の感受性で。

《吉田》おっしゃるとおり、廣瀬さんのように僕も一生懸命、なんでなんだとものすごく思った。どうしてみんな立ち上がらないんだと。県にも。でももうそれはやめて、人は忙しいし、いろいろ個人的な事情もあるし、考えてみたら、では僕は 24 時間 365 日、沖縄のことについて、がつつりぶつかっていけるかといったら、それは無理なんです。やはり 3 カ月間と決めてやるとか、断続的にしかできない。連続で活動は人口の多い東京とかしかできないわけです。では、百パーセントのうち何パーセント信頼していただければありがたいですかということをリアルに考えるようになってきた。

すると、このクサノネでつながっていこうということを考え出すようになっていくんです。どういうことかということ、相手を倒すということより、今なら政府、政府を倒すということより、今の社会がどうあるべきかということを徹底的に考えて、不偏不党。だから、僕の場合は安倍はやめろと言うのもやめようかなと。いや、TPO によって言ってますけどね。気分的にもう本当しようがないなと思いつつながら。

それで今大事なのは超高齢社会だ。共謀罪ももちろん大事です。法律の問題ですから。あとは、年金の問題とか、非常に切羽詰まった問題があるわけです。集団的自衛権もそうですし。原発もその一つ。であれば、対決姿勢を一回置いておいて、デモのときはそれはいいと思うのですが、普段から日常的に対決姿勢を取るのには難しいだろうなと思って。無理ですよ。やっぱり。楽しいほうが絶対続くし、だったらみんなで草むしりしようとか、緑化活動をしているうちに、あの政策まずいよねとかまれに言いながら草をむしっているほうが僕はいいなと思って。もしくは、益子であれば、陶器の話をしながらか、これはすばらしいなどと言いながら、その日の帰りに、今回の政策はまずいよねとか、そういう話ができるような関係性を作っていく。

1 人が 10 人作る。そうしたら、100 人は 1000 人の力になる。これがクサノネですね。なので、表だって全体でみんなでなにか行動しようということを僕は推奨していない。それ

は自由なんです。デモに参加する、しない。だから僕は、デモに参加しようよと言うときもあるかもしれませんが、参加しなさいとは言わないし、むしろ俺は参加するけれど、みんなはしなくていいよと言います。あとは知らんと。強制的にしたらたぶん駄目なんですよ。

僕がもの書きになりたいと思ったのも、誰かに言われてなったわけではないですから。憧れてなった。であれば、もっと純粋な根本の気持ちから分かるような活動を自分がしなくてはいけないんだと思うようになったんですね。

それで、活動をしていくうちに、自分のことだけ言っていたら駄目なんだなと。一般的に分かってほしいという空気がすごく世の中にあふれているんですが、やはり自分のことだけではなくて、お互いを理解しようよと言っているのだったら、自分から相手を理解するように、理解するという言い方もちょっと傲慢だと思うのですが、学ぶという言い方を僕はよくするのですが、学ばせていただくということをやって。だから沖縄に行って学ばせていただく気持ちでやったのがこれなんです。7号と8号。

沖縄はやはり、日本人がという言葉を使うのであれば、沖縄を考えていないのはあり得ないなというぐらいのレベルなんですよ。捨て石作戦というのがあって、それをさせられたのはなぜか。それは、本土のためだ。沖縄に行くと、本土、本土と聞こえてくるんです。本土ではと。本土って。ではここはナニドですかと聞きたくなつたんです。

一般的にはあそこは本島。島ということになっているんです。本島と本土。日本列島は一応大陸のような扱いになっているから、沖縄は沖縄から見ると本島なんでしょうけれど、でも、本島は良くて、本土のほう、あまり好ましい言葉ではないですよ。

大学生のときに仙台に行ったら、北海道の子が試験を受けに来ていて、僕は内地に来て見たかったんです。だから、今日はここに試験を受けに来たと言った。内地？ なにそれ。

「内地ってなに？」と聞いたら、知らないんですかと。北海道ではみんな、僕の親ぐらいの世代までは、本州のことを内地というんですよ。僕らは外地なんです。だから僕はずっと子どものころから内地に憧れて育ってきたんですと言われて、そうか、ごめんと。それだけでもかなりショックだったんです。それを抱えながら、それは震災前のことですが。そういう意味で北海道にしても沖縄にしても、真剣に考えていかないといけないと思って。これはそれでいったんです。

行ったところ、でも行くにしても、よく昔、沖縄に懺悔をしに謝りに行くというのが流行ったらしいです。作家が。けれど、僕は謝りに行くというよりは、誰もができるような、楽しくてかつシリアスで、深刻でということ、絶対に外さないような旅にしたかったんです。

その紀行文なんです。だいたい沖縄旅行へ行ったというと、海の写真とか楽しいが出てきて  
終わりみたいな。それ本当に沖縄に行ってきたのと。沖縄のなにを見てきたのと思いますね。

そういうことで、自分からやりたいことをやって、それでやわらかなクサノネ。だから、  
クサノネと言いつつも、不偏不党のクサノネで、連帯するだけでなく、「やわらかな」が  
僕の場合はつくんですね。一緒に草むしりをする。一緒に陶器の話をする。というわけで繋  
がるのですが、益子に来て僕はおもしろいなと思って、この本は『益子の民話』。皆さん持  
っていますか。知らないですか。添谷書店さんで販売しています。

これに出ている益子地区の話だったと思うのですが、チガヤという項目があつて。簡単に  
いえば、昔、たくさん戦があつて、犠牲になるのは女子どもであったということ。益子のお  
城にお箸も持ったこともない、やつのことできた、大切にされてきたお姫様がいたんです  
よね。

そのお姫様は、ある日のこと、お城が敵に攻め込まれて、それで逃げていくんですね。逃  
げていきながら、みんなに逃がしてもらうんです。暗い道を歩いて、やっと大羽の里にたど  
り着くんです。それで、西明寺のがけの上に出てきて、ここを下りれば逃げられますから、  
気をつけて行ってくださいと言われて。その辺に茅が生えていて、その茅をつかんだりしな  
がら、つかんで手に血がたくさん出るんですよ。それで血茅というのですが。

このお姫様は、血をたくさん出してどこまで行ったか。大羽の里には赤く染まった茅が見  
られるようになって、どうなったのか分からないお姫様を思って血茅と呼んでいるんだとき。  
おしまい。と書いてあるんです。益子の大事にされてきたお姫様は、血を流しながら逃げた  
んだ。しかもどこにいるか今は分からないだといったら、今はここ益子町に、子孫の人がい  
るのではないかと思ったり。あるいは、益子に引っ越してきた人が実はそうだったりしたり。  
遺伝子を持っている可能性が。思想精神を受け継いでいる可能性が。

原発避難も、危険から逃げていますね。益子の人も逃げたんだとか。この「逃げ」の思  
想というの僕も感じていて。クサノネであるときに、対決するととても大変なんです。

だから、一方で逃げる姿勢も非常に重要で。縄文時代は、あちらの集落、こちらの集落で  
問題が起きたら、もう離れるんです。集落ごと引っ越す。これは可能なんです。狩猟採集民  
族だから。だから、離合集散が多くて、自由に暮らしていた。だから、たくさん部族があ  
ってそれでよかった。けれど、弥生になると、農耕は、その土地にいななければいけない。だ  
から変わった事や問題が起きたら排除するか戦争するかしかないんです。

つまり、このデモというやり方は、ある意味で弥生らしいですよ。であれば、それはそ

れで必要だけれども、縄文のほうも考えてもいいなということで、先ほどの狩猟採集民族の感受性の話に戻りますが、逃げながらいろいろなところへ行っ、つながりを増やしていく。それもかなりおもしろいのではないかと。それでクサノネということです。だから、これは誰でもできるんです。

6.

原発は「科学」の問題なのか。

《廣瀬》大事なことがまだよく分かっていない人にそれを教える、啓蒙。それとは違って、その人の中から知が生まれてくるのを待つ。みなそういうことをきれいに言うかもしれない。私がやっていることは啓蒙ではなく、内発型のなにかです、とか。でも、吉田さんはそれを本当に、やさしくやわらかく実践できているのではないかなと思うんですよね。

《吉田》だから僕は今回、益子に来させてもらって、益子に呼ばれたと決まったときに、益子に行って、やはり益子のことを勉強させてもらって、益子の話がしたいなと内心すごく思っていたんです。だけど、福島の話をしてくださいということで呼んでいただいたので、しているわけなんですけれどもね。

でも本当に、全部通じていますよね。いろいろと。つながっているなと思って。益子の話も。風景の話も。この風景という言葉は本当に。廣瀬さんといえば風景というぐらいの、風景という言葉が似合うし、誠実な方だから、これは読めば読むほど誠実さが伝わってくる本なんです。学術的に真摯だし、その土地に入ったときに、僕みたいになんか入ってすぐ書くのではないんです。3年ぐらい入って、それで絵を描いて、ここの土地は昔からこういう民俗的な英知があったから、ここはこういうふうに防災できるとか、減災できるとか、そういうことを考えている。近代的なものだけではないんですよね。

《廣瀬》そうですね。環境デザインという仕事は、一般的には公園を設計したり、並木道を設計したりするものなのですが、それを本当にその地域に合わせて行いたいと考えています。たとえば今私たちがいる益子の町中は人工の環境で、しかし本通りに沿って家々が宿場のように張りつき、人間的な規模におさまっていて、その外側にも家々がありますが農地が入り混じり、さらにその外側を農地が取り巻いています。農地もまた人工の環境ですが、もともと周囲の山や丘や台地のすそから染み出た水がたまってできた湿地を田んぼに作り替えていたり、周囲の斜面には堆肥にする落葉や柴を採るために雑木林を残していたりと、人間が自

然と折り合いをつけられるようにつくられています。

だから、そういう民俗的な知恵を探すことや、地域の環境の成り立ちを調べることをしながら、地域に合う環境デザインがどう行えるかを考えていきます。町なかの道路を作るにしても、すでにまわりで家や道路の舗装に地面がふさがれてしまっていることに対して、雨が降っても地下に水が染みなくなっていることや、草花や落葉が炭素を固定したり、草花は光合成によって酸素を放出もしたりできなくなっていることをどう補えるか考えます。

浪江町で道路の環境デザインを手がけたときも、町の風土の部分となる道路の実現をめざしました。町の風土の一度失われてしまった部分を、このときの道路整備をきっかけに修復できないかと検討をしました。自分がデザインを依頼された土地と周辺にどんな自然があり、どんな歴史があり、どういうふう自然と人がつき合ってきたかということにくわしく調べなければ、本当の意味でその場にあった環境をかたちづくる手助けはできないという確信を、経験を積むほどに強めるに至りました。

普通はあまりそうではなくて、どちらかという、ある程度は地域の自然や歴史を調べて、それを多少は生かしたり、あるいは言い訳にしながら、自分が美しいと思うものを創造したいというタイプのデザイナーが多いと感じています。私も、若いときは本質的に物を考えている風にデザインについて語りながら、その実は自分の趣味に引っ張られていました。その矛盾にはっきり気がつけずにいて、気がつけていたことについては認識を曖昧にしたままにおいて。最近はずいぶん違います。その土地の風景をよくしようとなったら、たとえばこの建物が面する本通りでいえば、通り沿いのお店それぞれの経営状態は今どうなのかということなども気にしますね。いくつかの問題があるとして、それらは主に店の経営よりも、根本的には町の人口が減っていることからきているかもしれないとか。

この通りの風景がよくなるために、舗装を変えるとか、木を植えるとか、ベンチを置くというのはいわゆる「対症療法」に過ぎなくて、その前に、本質的に、沿道の生業、商いの実情を詳しく見つめ直し、考え直してみるとか、地域の環境を形成する要因のまずいところを直すことをすると、商いを難しくしていた問題が解消された結果として通りの環境が店舗の経営者にも利用者にも好ましくなり、風景もよくなる…そういうことを考えるようになったので、この本『風景資本論』を書いてみたんです。

《吉田》これは本当にすごい本で、廣瀬さんの各地での仕事仕事に全部こういう本が出るべきだと僕は思うんです。もし僕がライターでなくて、ただ読むのが好きなままであれば、廣瀬さんの仕事にたぶん協力していただろうなと思うんです。調査とかはすごく時間がかかり

ますよね。であれば、自分の 5%とかを使って、廣瀬さんの技術とかを教えてください代わりに、調査結果を渡すというような、なにかできればなと思ったりするぐらいいい本で。

たとえば、土砂崩れのあれがありますよね。山の法面にべたっとコンクリートをやります。ありますよね。よく道路の。あれは台風で崩れてしまうんですよね。

《廣瀬》道路を山裾に通すために山の一部を切りますと、切断面が露出します。そのままにすると崩れてしまうからと、日本ではよくモルタルやコンクリートブロックを使って固めるんですが、その上の山に降った雨が、土の中で飽和して行き場がなくなると内側から押し潰すのを壊します。

私は石を積んで土留めをしたほうがよい場合があると考えています。石積みの隙間を残しておく、そこから水を吐きます。だから、石積みは、重く硬いものを組み合わせてつくる強固な擁壁である一方、水はけのよい膜のような構造でもあると考えています。でも、コンクリートのブロックを使う人たちは、自分にはその根拠が理解できないのですが、水抜き孔を一応設けていて、それがごくわずかです。塩化ビニールのパイプが疎らに入っていますが、全く足りていないと考えています。

《吉田》しかもあれは再利用しにくいですよね。強アルカリ性だとか。

《廣瀬》建物を建てる時や道路を作るとき基礎に、普通は砕いた石を敷くのですが、再生利用と称して壊れたコンクリートを砕いたものを使っている例がある。でもコンクリートは高いアルカリ状態に保たれているので、その影響をきちんと調べないと。それが土や微生物に影響を与えないわけではないと思うんです。

《吉田》すごいことを考えているんですね。すごく細かい。細かくてしかも総合的で、すごいなと思って。

僕はそういうことまでまねはできないのですが、最近、ホームセンターでこんな。これは顕微鏡なんです。分かりますか。最近出たんです。ホームセンターで売っている顕微鏡で、ライトがつけられて。ぽつとやってフォーカスと倍率を入れたらもう見られます。

これは益子の森で拾ってきた土や笹などなんですが、こういうのを顕微鏡で見て楽しんでみたり。たぶん廣瀬さんもこういうのが好きだろうなと。

《廣瀬》好きですね。こういう自然のものがあると話しやすいと思うのですが、原発のことにも関係するのですが、私たちの体も他の動物や植物の体も、ほとんどが水からできています。年代によって違いますが平均して 60%から 70%ぐらいでしょうか。水は、飲んで出して、飲んで出してを続けないといけない。70%ためたら、一切水を飲まなくてはいいいわけ

ではなくて、出して飲んでと。

そして地球上の水の、たしか 97% を超すぐらいが海水でしたか。

《吉田》 そんな感じですね。

《廣瀬》 残る 3% 弱が淡水で、氷河としてある他に、微妙なバランスの中で、空と海と川や湖や地下をめぐっているんですね。それがいろいろな栄養塩や微量金属を運ぶなかで、こういう笹の葉とか動物の体や私たちの体ができているのに、原子核を人工的に分裂させてエネルギーを取り出すとか、やはり地球上の物質循環の微妙なバランスを変えてしまうことに結びつきます。やってみたらできたからと言って、科学、科学と簡単に言わないで、本当にそれをやっていいのかということをもっと考えなければいけません。植物の葉ならば枯れ落ちても分解して土に還って、そこからまた生き物が生まれ出て、人間はそれを食べたり何か他に利用したりできると、物質循環が守られます。現代の人間はそのなかに自分たちの生活を置き直すようなことをしないと、今回の原発事故のように思ってもみなかったことが起きてしまう。

《吉田》 科学というけれど。「科学」と言われると僕らは思考停止になって、嫌だ、詳しくないからいいです、と言いたくなるのですが、最近、鬼頭秀一先生にヴェルトガイストを褒めてもらって、鬼頭さんの存在を知り、彼の本を見てみたんですね。そうしたら、環境倫理学の先生だと。自然保護に関する本を出していらっしやいますよね。

見たら、非常におもしろいことが書いてあって。……鬼頭さんの本だったかな、まあ（笑）。科学は、たとえばデータを出してきますよね。でもそのデータは、世界があるとしたら、その一部分だけ取り出してきたデータで出した結論なわけですよ。カメラでいうと、そのファインダーの中でしかデータは取れないわけですね。どのデータを出してくるかによって結論が変わってくる。だけど、一つのデータが、もしくは百個でもいいですが、都合のいいデータを全員が出す。これ、なかなか科学と言いつらいですよ。非常に主観的なんですよね。

僕などは主観的というか、一個の事実であって、たとえば一個の事実がモニタリングポストで、行政だから信頼があるのかということ、それは違うと思いますし。なにせ原発は安全だった。絶対安全だったわけです。そう思って育ってきたわけなので。それがこんなことになって、なに嘘をついているんだと。単純にそう思うわけで。だから、原発は絶対安全の科学だった。科学だったんです。

科学というのは人間のやってきたことだから、決してそれは完璧なものではない。こうい

った、部分だけ取り出すデータのことをフレーミングというらしいですね。

《廣瀬》なるほど。

《吉田》フレームワークのフレーム。

《廣瀬》切り取る。

《吉田》そうです。どこを取るかということで変わってくる。それを見たとき、あ、なるほどと思って、いろいろな記事がありますが、風評被害に関する記事もそうですが、フレーミングが非常に行われているのではないかという気はします。

どこまでが安全で、どこまでが危険でというのは、これは放射線はやはり総合的なリスクの一つになっているではないですか。排気ガスもリスクだし。でも、だからいいかというのと全然そんなことなく。排気ガスだって、吸い込むことに誰も同意していないはずなんです。ましてや、作物から放射性物質が検出されなかったからといって、ではその土地が 0.15 ですという、それは作物には入っていないけれど、その作物はずっとそこに置いてあったわけで、0.15 分、被曝はしているわけです。

だから、よく汚染作物だとか、放射能作物だとかという言葉はちょっとひどいかなと思うんですが、被曝作物だというのは、別に外れてもいないんですよね。太陽光にももちろん放射線は入っているそうですが。

ただ、放射能汚染に関していうと、そういうふうな話になっていくのですが、なにより避難者がたぶん大事にしているのは、被曝させられること。放射性物質をべっとりと、体や肺などに入れさせられることを望んでいないんです。勝手にやられたわけで。それはやはり被災、被害なんです。実害。それが実害かなと思うんです。

この苦しみは、本当に一朝一夕で語れるものではなくて、気が狂いそうになるんです。最初のころ。僕のことを何年前かから知っている人は皆さん分かると思うのですが。お酒に酔っ払って、夜中に狂っているということは、たぶん日常でしたものね。でもそれは本当に、考えれば考えるほど腹が立ってくるんです。

でも、東電は出てこないし。出てきたらもちろん言いますよ。いつも言っていますし。あんまりふざけるなよと言っていますし。誰か偉い人が出てきたら、必ず謝ってもらいますし。それでも彼らは誠意をその場では見せても、組織としては実行してこないです。だから、今僕は失望しているんです。東電の対応にはものすごくがっかりしていますね。

そういうわけなので、僕は自然エネルギーとか再生エネルギーとか、そういうことをきっちりと考えていきたいと思うようになりましたね。原発は、あつてこんなことになるんだっ

たら、ないほうが良いと考えるのは当然です。もう二度とこんなことは、誰にも起きてほしくないと思います。

お金、お金とみんな言うけれど、僕は震災前からなに不自由ない暮らしだったんです。朝起きて、すずめの声を聞いて、本を読んで。美しい梨畑の景色を見て、ああ美しい、親父のおかげだと思いながら農作業をして。夕方になったら塾をやって、ちゃんと勉強してくるんだぞなんて言いながら。哲学書を読んで寝る。農閑期は長いので、あと私は遊んでいるだけです。だから、お金がなくても農家は結構自由な暮らしができますよ。

7.

## 震災後に問う、わたしたち人間の資本

《廣瀬》それと、浜通りはきれいなところですからね。気候は穏やかで暖かいし。

《吉田》それに何世代も生きたら、いかに貧乏な農家でも、やはりすごい収入ですよ。総計したら。末代まで就職に困らないわけです。子どもも孫も親戚もずっと。でも、そこで一代限りの一時的な賠償金とかというのが入って、それでもういいでしょうと言われてしまうと、ではその将来のあれはあるのか。謎なんですよ。それが全部なくなってしまっているのに、いいね、うらやましいねと言われても。そう思うのも無理はないけれども、しかしちょっと待ってくれ、と思うんです。

だから沖縄の人たちも、基地なんか要らないんだと、自然あるがままが一番いいんだという気持ちはすごく分かります。基地が入って、なにかわからないけれども、仮に、ちょっと補助金まがいのもをもらったとしても、絶対うれしいわけじゃないです。その孫とかその孫とかに、ずっとつないでいけたはずの漁業や自然を無理やり手放させられるということはあまりにもひどいですね。しかもたくさん基地があつてとにかく危ない。

原発も 54 基もあつて。安全だというならね、それを非常に少なく、たとえば研究施設だったら百歩譲ってみんなで議論していこうぐらいに考えると思うんです。でも、54 基はちょっと多すぎますよね。それで、北朝鮮のニュースはどうのこうの。だけど、原発の話は無視する。あまり言い過ぎると山本太郎みたいになってくるからやめておきますが。僕は山本太郎さん好きですけどね。そういうキャラではないので（笑）。

《廣瀬》でも、賠償は一代だけに対してされるわけですが、本当は、その土地に住んで、田畑や果樹園をつくって何世代も食べ続けられるのだと。それは私も今はとりましたね。本

当ですよ。

《吉田》私の分かる限りですけど。

《廣瀬》一代にだけ償うのは、本当の意味で償ったことにならない。未来の土地と資源の利用の可能性に対しては何をどう償えるのかということの問題視されているのです。

《吉田》そうなんです。法律では今のところできないですよ。

《廣瀬》浜通り地方には随分通って、親しくしていただいてきた方が少なくありません。そういう方が本当に自分の愛していたふるさとから引き離されてしまった苦しみや悲しみは、自分にもかなりのところまで感じられると思っています。それに加えて、本来は世代を超えて引き継がれる財産というか、将来、土地と家さえあれば食べていける、暮らしていけるという心のよりどころのようなものが断ち切られてしまったという。確かにそうなんです。それは、今日吉田さんのお話を伺うまで意識していなかったです。

《吉田》財産なんていうと、そういうことなんですけど。財産というよりは、まさしく僕の中で風景という言葉がぴったりくるんです。

《廣瀬》そうでしたか。私が資本と言っているのは、マルクスの資本論とは関係がなくて、シューマッハーという経済学者に影響を受けてのことです。ドイツに生まれて後にイギリスへ移った人で、『スモール イズ ビューティフル』という本を書いています。

経済学者ですが、自然は人間にとって資本だと明確に述べました。資本は資源とは違う。資源は使うもの、でも資本は、会社を思い浮かべればわかりやすいはずですが、なくしてしまったら、会社なら会社をやっていけないでしょう、だからずっと持っていなくてはいけないものだ。企業経営者の多くや経済至上主義の人々が否定できないように、資本という言葉をやっとうまく扱っています。だけど、人間はそれを誤解していて、資源だと思って、自分の所得だと思って平気で浪費してしまう。そうすると、自分たちは生きていけない。人間は自然を作れないから。だから、自然が資本であるということを経済学の基本に置くべきと書かれた本なんです。

でも、自然だけではなくて、たとえば浜通りの梨畑の風景とか、三陸海岸の小さな漁港の風景とか、自然の営みが存続して、そこから他の生き物などの自然物を人が適切な量だけ得て、自分で食べたり他の人に渡してお金に換えたりしながら生業と暮らしの営みもまた続けられる、その全体が資本と考えられます。自然の資本というよりも、特にアジアなどでは、人間が自然に働きかけながら、うまく折り合いをつけて暮らしていた時代が最近までありましたので、そういう風景ごと、守るとか直すということを考えると、実はお金の流れのこと

だけ考えるよりも経済学的に正しいといえるのではないかと。環境の保全それ自体や、環境への配慮、環境の修復などを含めて投資することを「経済的でない」とする経済学者や企業経営者、政治家、行政官らが日本には特に多いと思います。竹中平蔵のように金融のことばかり言っている学者がもてはやされているように見えます。しかし、それは本当の経済学ではないです。

日本では宇沢弘文先生が『社会的共通資本』という本を書きましたが、それこそ誠実な経済学者は哲学者のようになってしまおうと思っています。自然科学者のようにもなります。きちんと人間が生き続けられるように、お金以外のものまでがよく循環するように、そういう経済学にしてしまうのです。

だから、原発ははみ出す。トリミングをして、フレーミングをして、自分たちのいる業界の内部では理論も事業もうまくいっているつもりかもしれないけれども、でも自分たちだけが業界の外に無理を通して儲けているだけです。経済学ではそれを、外部不経済を置き去りにしていると言うはずですが。自分たちのいる外側を、平気で不経済にしている。それまで含んだら、実は全然経済的ではない。事故が起きれば満足に補償もできないし。このようなことは、原発だけでなく政府や省庁や地方公共団体や企業などのしていることに、大なり小なり当てはまるとしています。だから、私たちがそれぞれの仕事や生活において外部不経済を少しずつ解消していくようにとも考えて、私はこの本を書きました。

《吉田》そういう意味で、これはすごくうまいタイトルの付け方ですよ。

《廣瀬》シューマッハーがいたからで、シューマッハーの構想に対して環境デザイナーとして素直にもっとこうした方がよいと思う面が見いだせたので、自分でそういうコンセプトの本を書いてしまっただけなんですけどね。

《吉田》風景って神のようなものだなと思っていて。神ってなんだろうなとずっと考えていて。そうしたら、先ほども言いましたが、フォイエルバッハが『キリスト教の本質』という本で言っているのですが、フォイエルバッハによると、神はどの宗教においても偶像崇拜である。それはなにを偶像にしたものかといったら、人間の本質を偶像化したものである。だから、神は怒ったり泣いたり、憎しみとか愛とか、人間がなし得ることで、すべて。みたいなことをフォイエルバッハは言っている。別に僕はフォイエルバッハ信者ではないですが、とりあえず一つの考えとして、なるほどなと思った。

ついこの間は、カール・バルトを読んで、おもしろいなと。カール・バルトが書いた稲山さんという友人がいるのですが、その本を読んで、なるほどなとか思ったんですが、そのこ

とは今言おうとして忘れてしまったのですが最近、フォイエルバッハを読んでいて。その思ったときに、風景に対しても、人間の本质を人間は風景の中に映し込んでいるんだなと思ったんです。だから、風景が復讐してくる。墮落した人間に復讐してくるんです。それが災害なんだろうなと。災害というか、人災という言い方の。

だから遠藤由美子さんは、廣瀬さんが自然との共生といったときに、いや、恐れ畏怖するものだよと廣瀬さんに言ったという。

《廣瀬》私ではないです。

《吉田》あ、別の先生。

《廣瀬》怒っていました。遠藤さんは先ほどの映画に出ていましたね。

《吉田》ああ、そうですね。

《廣瀬》お寺の住職。女性の住職で、奥会津書房という小さな郷土出版社をやっているらしいです。優しい雰囲気をお持ちの方です。でも目の前でおかしなことを言っている人がいると、セミナーの講師をつとめた大学の先生にも怒って。

《吉田》結構マジで。

《廣瀬》場が凍りつくような感じでした。そのときは。

《吉田》はっはっは（笑）念のため、文になるときは誤解を与えないよう、遠藤さんは普段もいつも、心の底から、すごく優しいかただと付け加えておきます。遠藤由美子さんが今やっっているのは、「ふくしま本の森」というプロジェクトです。本を寄付してもらって、私設図書館を作って、借りていったら返さなくてもいいというか、いつ返してもいいという図書館なんです。本棚一つ、まるごとどこかに貸して、その本棚をそこでの私設図書館にする。本を誰の所有にもしないという図書館なんです。読まなくなったら、捨てたり売ったりしないで、返してねということだけが約束なんです。それで、福島じゅうに本の森を作っていこうという。皆さん楽しまれ、遠藤さんはいつも笑顔に囲まれています。

8.

WELTGEIST FUKUSHIMA--やわらかなクサノネ

《廣瀬》「ふくしま本の森」の活動は、会津だけでやっていただけではないんですね。

《吉田》そうなんです。はい。そういう活動もやわらかなクサノネだろうなと思ったりします。一種の人間の思想でもある。そこの図書館に行けば落ち着く。ヒジノワのように、ここ

に來ればなにか落ちて着く。みんながお互いに、大変だったねと言い合えるような関係は大事ですね。その場があつてこそだなと思つて。

場作りといえば、天井君が「ふうあいねっと」で、茨城のヴェルトガイストのライターの天井優志君が、NPO 法人の活動で、いろいろな場作りに支援活動というか、協力をずっとやっていて、情報を伝達していくんですが、彼のすごいところは、……例えば、今ヒジノワに集まっている人たちはみんなものすごい頭がよくて、ものすごい知識人なんですよね。僕は今日は教わりたぐらいだと思つて、ずっと考えながら來たんですが。

だけど、天井君がやっていることは、ある意味ではそういう場を持った知識人の輪にまつたくない場所の、そんな、ヒジノワってどこ？みたいな、益子町にいてもヒジノワという場所を知らない人のために、いわば彼は活動している。本の森という場所も会津にいても知らない人がいっぱいいると思うし、そういう知らない人に届ける活動を彼はしていたんです。

それはすごく重要だなと思つて。僕はそういうのは大体「新規」という言い方で終わらせてしまうのですが、どこぞの営業みたいに。でもとにかくそういうのは大事だなと思つて見ている。だから、こういうふうな本をやるんですね。本はやはりどこかに置いてもらえれば、偶然の出会いがあつて。例えば、どこかの壁に、雑誌ヴェルトガイストの表紙がべたつと貼つてある。すると、「なんじゃこりゃ？」みたいな興味が湧く瞬間が絶対にある。ヴェルト沖繩、8号ならば、本当はミヤキセンなんです。現代行政的には、今帰仁（ナキジン）という村があつて、その昔の名前は、ミヤキセンとかなんです。昔の役場の文章にこういうふうを書いてあるんです。だからこういう名前なんです。

こういうのを見たときに一瞬立ち止まる。「ナキジンは知ってるけどミヤキゼンってなんだよ」と。この一瞬の立ち止まりがたぶんアートなのではないかなと思ひまして、知っている中だけで話すのも大事ですが、知らないところにどう伝えていくかというのが非常に大事なのではないかなと思ひまして、逆に「パツと分からない名前」にしたという。

それで表側に、あんまり厳しい表紙になっていないんです。厳しくないですよ。やさしい、たぶんそんなに手にとつても違和感ない。家に置いておいても、お父さんに怒られなさそうですね。そのぐらいの表紙になっているほうがいいかなと思ひまして。

《廣瀬》 そうだったんですね。やさしくやわらかな繋がりを、ということですね。ありがとうございました。

それでは、この後は夕食交流会がありますが、その前に、地域で関連する活動されている方々のお話伺えるということです。ここでマイクを進行に返します。

.....

《簗田》 ありがとうございます。今日のお話は、原発のこと、福島のことを芯にしなが  
ら、おふたりのこれまでの積み重ねから、哲学や思想的なことや民俗学的なことに広げなが  
ら、人間として、一人一人がどう考えて、どう生きていくのかということのヒントになるよ  
うな、そんなお話が聞けたと思います。皆さんからの感想などは、夕食交流会の時に伺えたら  
と思います。吉田さん、廣瀬さん、ありがとうございました。

この後、せっかくの機会なので、震災後に、栃木を拠点にして活動されている団体の方、  
おふたりから、活動内容の共有ということで、お話をさせていただきます。

.....

丸山智子さん | 真岡市

「甲状腺エコー検査in益子」（主催：関東子ども健康調査支援基金、協力：にじいろみらい）世話人の1人

こんにちは。真岡市に住んでいます丸山と申します。私は甲状腺の検査をしているので  
すが、2~3分でまとめろということで書いてきました。

益子で仲間と一緒に甲状腺検診の運営をするようになって3年目になります。毎年7月  
に行っていて、来月8日、9日に益子では3回目の検診が行われます。

まず、誰がどのように行っているかをご説明します。主催は関東子ども健康調査支援基金  
という団体で、関東で年間20カ所以上、約2000名の子どもが検診をすでに受けています。  
開催地は年々増えています。団体は非営利で、現役の6名のお医者さまが協力してくださ  
っているのですが、すべてボランティアです。

私たちはそのうちの益子会場の運営の担当をしているのですが、会場の確保だったり、受  
診者の募集、当日の運営などをしていて、毎回100名ぐらいの子どもが受診しています。

今日も何人かこのなかにメンバーがいるのですが、私たち運営グループのメンバーのほと  
んどが、震災当時に0歳から5~6歳ぐらいだった子どもを持つ母親です。検診の運営をす  
るようになったきっかけなんです。震災から3年後の2014年に水戸で甲状腺の検査を受  
けられると聞いて、みんなで一緒に受けに行ったことです。

震災直後に放射性物質についてさまざまな情報が飛び交ったと思うのですが、福島と比べ

るとこの栃木県の南部はすごくあいまいな位置づけで、私たちは本当にここに住み続けて大丈夫なのか、子どもたちは健康に大きくなることができるのかと悩んでいて、勉強会とか講演会に参加して、素人ながらもそのときの状況を理解しようと思いました。

政府は、おきまりの…直ちに影響はないと言い続けていて、ある人は関東全域、子どもが住めるような状況ではないと言っている。結局、誰も正解がわからないという状況だったと思います。

私も農家なのですが、個人的に移住も考えました。でも、それまで大切にしてきた人とのつながりをなかなか断ち切ることはできなくて、できればここで暮らしたいと思いました。そのために人の意見に振り回されるのではなくて、自分の子どもが今どういう状態なのか、どれほどの影響を受けているのか、いないのかを把握して、その都度自分で判断するしかないと思いました。

水戸に検診を受けに行ったのですが、検診がすべてボランティアで運営されていることを知って、主催団体の方に少しお話を聞いて、ほぼその場で自分たちでやろうということを決めました。

そのころ、県内で甲状腺の検査を受けられるのが那須塩原しかなくて、私たちが那須や茨城へ行って検診を受けるのは、その地域の方が検診を受ける機会を奪ってしまうことにもなると考えて、益子で検診をやろうと決めたのですが、いざやろうと思ったときに 100 名集まるのか不安もありました。

先ほども言ったように、那須塩原などは土壌の線量も高くて心配している人が多かったと思うのですが、初めて益子で検診をしたのが震災から 4 年後だったのですが、事故のことなどはほとんど話題に上るようなこともなくて、なにもなかったような感じだったので、本当に人が集まるのかなというのが不安だったのですが、いざ募集してみると、あっという間に 100 名の定員が埋まって、今年に関してはたった 2 日間で定員に達しました。

これは、いくら政府が基準値以下だから安全と言っても、数字的に安全イコール安心ではないということの表れだと思っています。受診した方からは、異常がなくて安心しましたとか、心配しているのは自分だけだと思っていましたが、同じように心配している人がいることを知って安心しましたというような感想をいただいています。

一度検診を受けて異常がなかったから安心ということでもないのですが、今後もこの地域で安心して暮らしていけるよう、10 年、20 年というスパンで、細く長く活動を続けていきたいと思っています。

中江綾さん | 宇都宮市「とちぎこども遊び場 放射能測定プロジェクト」

宇都宮から来ました中江綾と申します。私は自分の子どもを、自主保育とって、里山とか自然の中で自由に遊ばせるという育児をしているのですが、やはり栃木県なので、汚染は少ないといわれても気になる。でも、いったいどうしたら…と、その不安な気持ちを抱えながら、子どもたちを外で遊ばせるかということで、ずっと悩んでいました。悩みながら、それでもやっぱり外で…ということで、里山などで遊ばせていました。

そんなときに、あちらに座っている方なのですが、小栗秀夫さんから一通のメールを転送していただきました。そのメールは「みんなのデータサイト」という全国三十数カ所の市民放射能測定所が参加するデータサイトが行っていた東日本土壌ベクレル測定プロジェクトからのものでした。そのプロジェクトの中心が愛知にある放射能測定所、C-ラボさん（未来へつなげる・東海ネット市民放射能センター）で、東日本土壌ベクレル測定プロジェクトをしていますというものでした。プロジェクトの内容は17都道府県で相対的にデータを比較できるよう、ベクレルのマップを作りたいというものでした。セシウム134の半減期を迎えてしまうと、今ある放射能は福島由来なのかどうなのかが分からなくなってしまうので、早急に東日本の土壌ベクレル、土壌の放射能を測定したいというメールをもらったんです。

栃木県の皆さんへというメールの中で、栃木県では4~5回、サンプリングの方法についての講習会をしたのですが、数値が全然集まってこない。どうしたものかと困っているというメールなんです。私はそれを見たときに、では私が協力しようと思って、自分の周りで自主保育の活動を一緒にしている母たちに呼びかけて、100近く、子どもたちがよく遊ぶ場所とかを中心に土を採取して、C-ラボに送りました。

そのプロジェクトを昨年春から1年を通してやったのですが、ついに今年はプロジェクトが完了して、あそこに置かせてもらっている、マップが出来上がりました。これはインターネット上で公開されています。「みんなのデータサイト」のホームページに行き、「土壌ベクレルプロジェクト」のフィクスを見ると、本当に事細かく、自分たちが採取した場所の土のベクレルを知ることができます。かなり完成度の高いマップができたということで、測定した記録を実際に残すことの大切さをこの活動を通して学ばせてもらいました。

ただ、このプロジェクトでは、相対的に汚染を比較しようということで、ホットスポットには注目をしていないんです。子どもを実際に自然の中に遊ばせるとなると、いろいろな場所に行くので、それこそ滑り台の下はホットスポットで数値が高くて…お母さんたちが実際に気になる場所はホットスポットなんです。この活動をしている中で、そういうお母さんた

ちの生の声を聞いて、次なるアクションとしてホットスポット探しをしようではないかという事で、今度は独自に活動が始まりました。今年の春から小栗秀夫さんにも協力いただいて、「栃木子ども遊び場放射線量測定プロジェクト」を開始しました。このプロジェクト名も…、これは私がつけた名前でもなんでもなくて、なんとなく、みんなで一緒にやろうと言って集まったお母さんたちが名付けてくれました。次々にみんなが動いてくださって、こんな立派な募金箱まで完成しました。

この放射線の測定プロジェクトでなにをやろうとしているかというと、子どもたちがよく行く公園などのホットスポットを、調査しマップ化していこうというものです。すごく高性能な放射線測定器を使いまして、数秒ごとに空間線量をばっと出す測定器なのですが、どの辺がなんとなく高いなというのをまずは割り出す作業をしています。

これは公園の地図なんですけど、その装置を持って公園内をぐるぐるまわると、何百カ所という空間線量をデータとして取ることができるんです。今はまだパソコン上のデータでしかありませんが、最終的には、マップを完成させ、高そうなところをお母さんたちに周知できたらと思っています。

そんなことで、まだこれは継続しながら、今は実行している途中で、資金が非常に…。みんなが自腹を切ってやっている状態なので、かく言う私も自腹を切ってやっています。資金が思うように集まらなくて、なかなか大変なんです。そんな中でも、みんな必死にやっていますので、皆さんぜひご協力よろしくお願いします。この募金箱をあちらに置いておりますので、どうぞよろしくお願いします。 (終)